なみえ母・娘避難物語
帰らない

母「そうね。頑張れんのね・・・・うん・・・・うん、わかった。母さん、あんたを信じる。もう泣くのはやめて、涙をふいて頑張りなさい。・・・・ところで近くに誰かいる。・・・・そう、婦長さんがいるの？・・・その婦長さんに母さんからお願いしたいことがあるので代わってもらえる？」

母「あっ、婦長さんですか？・・・この度は大変お世話になります。・・・はい・・・はい、ありがとうございます。・・・・でも大丈夫と思います。私の娘です。患者さんをほっといて帰ることはしません。・・・はい・・・はい、ありがとうございます。そういっていただきうれしいです。でも、私たちは娘を信じています。あの子はまだ頑張れると思います。ただ婦長さん、一つ・・・一つだけお願いがあります。

母「婦長さん、大変申し訳ありませんが、横にいる私の娘を私に代わってギュッと抱きしめてもらえないでしょうか。おねがいいたします」
NA“この物語は2011年東日本大震災を乗り越えた一組の家族の出来事を元に作られた母と娘の物語です。時計の針は震災発生前に戻ります。

「母さん、大丈夫かなあ。じっちゃんの葬式後、家から出ないもん。なんかあったの？」
「よくわかんないけど、色々あるみたい」
「でもまあ、今回、仙台に一緒に行くって言っただけでも一歩前進だよ」
「それにしても、まさか、あの母さんが、ここまでになるとはね・・・ふう」
「そんだけ、家族においてじいちゃんの存在が大きかったんだよ」
「無口なじっちゃんだったけどね。よくわかんないけど、家族をつないでいたタガがはずれたってことになるんだろうね。

「農作業でどこにも連れて行ってもらえなかったけど、今となってはあんときが懐かしいね」
「じいちゃんも昼間は黙々と働くばっか、話をするのは夜お酒をのんだときだけだけど、それでも良く家族をまとめていたんだろうね。でも今はバラバラ」
「大丈夫だよ、父ちゃんがなんとかするよ」
「そうだといいけど・・・」
「それより姉ちゃんこそ、どうするの？家出るんでしょ」

「仕事のことを考えるとね。やっぱ近い方がいいかなって思ったの」
「それだけじゃないでしょ」
「・・・・私、昔からそうだったんだけどいがみ合うのがダメなんだ。喧嘩しているのを見聞しているだけだけで壊れてしまいそうで怖いの」
「でも、今、姉ちゃんがいなくなると、母さん、本当にダメになっちゃうよ」
「それはないよ。あの母ちゃんだよ。一時的には落ち込んでも乗り越えるよ」
「そうかなあ」
「朝から晩まで農家の嫁として家のことで、たまの休みは地域のこと、学校のことでしょ。子供のことは二の次なんだよ」
「それは違うよ」

「以前、父さんと母さんが夜遅くまではなしあっていたじゃない。覚えてる？」
「寝れなかったよね」
「農家の嫁として無茶苦茶忙しい中、PTA の役員になった本当の理由は私たちの学校での様子が知りたかったからしいよ」
「なんでPTAの役員と私たちが関係あるの？別にあんとき何もいわなかったよ」
「PTAの役員になれば、学校に行く機会が増えるでしょ。そしたら目にすることも増えるだろって思ったみたい」
「そうだったんだ」
「知らなかったの？姉ちゃんのこと随分、心配してたんだから」
「そんなこと今まで一言もいってくれなかったよ。私のことなんてどうでもいいんだと思っていた」

「おーい、用意はできたか、行くぞ」
「はーい、今行く」
「この話はここまで久々、母ちゃんがやっと家をでる気になったんだから、今日は何もかも忘れて楽しもう」
「そうだね。家族四人でどこか行くなんて、本当に久々だよね」
「おーい、いくぞ」
「はーい」
NA：その日は久々、母と娘3人が休み、父親が仙台に用事があったので、それについていくこととなり、久々、家族4人の小旅行を楽しんでいました。父親が仙台で仕事関係の人に会うため別れた直後のことです。

ゴーゴゴゴゴ
母「キャー、なっなに、なんななの」

母「じッ地震だ。おさまったら直ぐに外に出るよ！」
ゴーゴゴゴゴ
娘「外ってどこ」
母「駐車場、駐車場にでるの！」
娘「わっわかった。キャー」
次女「無理よ、全然おさまんない。動けないよ。ああ壁が！」
ドッドドドドド
長女「あぶない！」

母「あっありがとう。危うく下敷きになるところだった。助かった」
次女「収まったみたい。とりあえず外に出よう」
タタタタタ
母「はあはあはあ」
次女「はあはあはあ」
長女「ここなら大丈夫ね」
次女「あ！！父さん、父さんは大丈夫、電話してみて」
母「さっきから電話してんだけどダメ。いくら電話してもつながんないのよ」

警備の人「おーい、そこにいるんじゃない。上へあがれ上へ。津波くっぞ！」
母「ええっ津波～い」
次女「はあはあはあ、だめ動けない」
母「何言ってんの！あんたたち陸上部でしょ！行くよ！」
NA「警備の人の声に押されるように再び三人は建物に入り屋上へと駆け上がります。屋上につくかつかないかの時でした。ものすごい音と共に目の前の川を津波が逆流してきました。

ゴゴゴゴゴゴー
長女「すごいね」
母「やっぱ、父さんでないなあ・・・・・」
次女「浪江大丈夫かなあ」
母「家までは津波こないよ。山だから」
長女「職場はあぶないよね・・・・・」
次女「あそこは海に近いもんね」
長女「母さん、私、仕事に行く。送って」
母「わかった」
NA「家族が合流し福島にたどり着くのに丸一日を要しました。長女は家に立ちより必要なものを手にすると直ぐに浪江幾世橋地区にある職場の介護施設に向かいました」

NA「そこは戦場、入り口は崩れ落ち、その横にある講堂に布団が引き詰められ、そこに寝かされていたのです」
先輩「みゆきちゃん、ありがとうね。助かるよ。昨日からもう何が何だかわかんなくって、みんな一杯いっぱいよ」
長女「直ぐにこれなくって申し訳ありません。仙台にいたもんで」
先輩「早速で悪いんだけど、皆さんにお薬を配らないといけないの手伝ってくれる」
長女「はい」

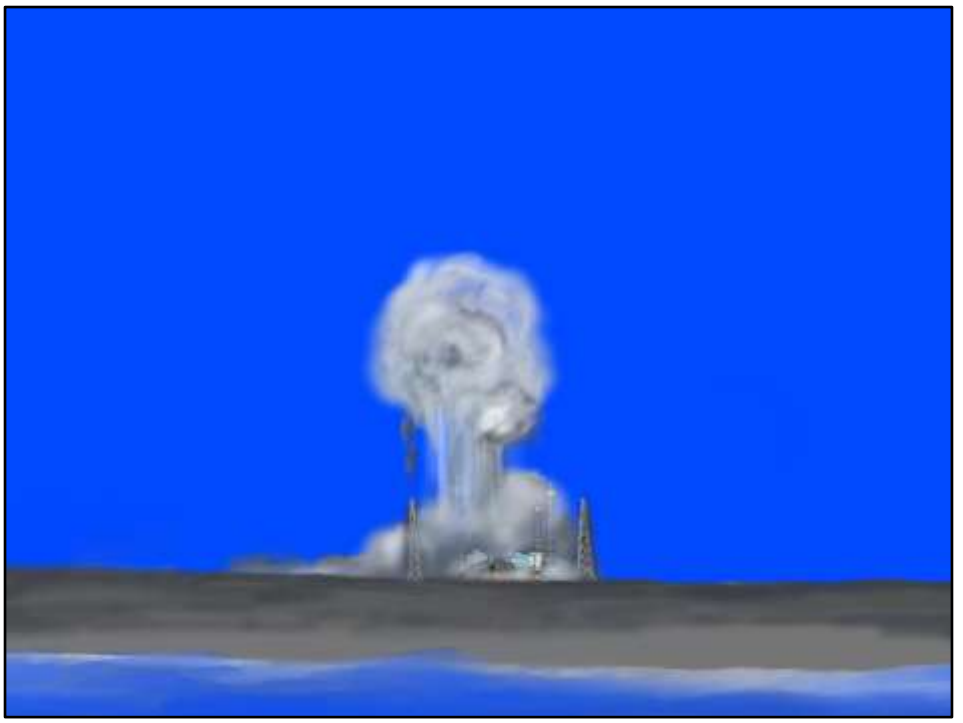
NA「普段はおとなしい患者さんですが、異常な事態に不安が高まり、泣き叫ぶ人、どなる人、様々、まさに修羅場と化したのです」
患者1「寒いよ、寒い」
看護師「ごめんね、ごめん。直ぐにね、電気が来るから、少しだけ我慢してね」
患者2「うっ、いてててて。はあはあはあ・・はあはあはあ、息ができねえ・・・・・」
先輩「すぐ、すぐにお薬、持っていく、大きくゆっくりと息をすって。・・・
そうゆっくりとね。大丈夫よ。　みゆきちゃん早くして」

患者2「・・はあはあはあ、・・・うおおおおお、うううう、おおお」
先輩「どうした？どうしたのどこか痛い？」
患者2「うおおおおお、うっ」
先輩「来て！だれか来て、先生、先生をよんで。薬はまだ。いつもの薬を早く！！」
ザワザワザワ、タッタタタタ

長女「くっくすり持ってきました」
先輩「もう、いいよ。・・・もう必要なくなった。間に合わなかったよ」
長女「・・・すっすいません」

所長「おーい、みんな聞いてくれ。もうここにはいられねえんだ。直ぐに救護施設浪江ひまわり荘に移動すっど」
先輩「なんでです。なんで移動するんですか。100人からいるのに無理ですよ」
看護師「ここにいれば自衛隊が迎えにきてくれます。動かねえほうがいいですよ」
所長「今しがた役場から連絡がはいった。自衛隊はこねえ。それに原発が危険な状態で、一部爆発したみてえなんだ」
看護師「ええっ原発が爆発？そしたら放射能が流れてくるんでねえか」
所長「だから移動するんだ。原発から10km圏内にいるものは直ぐにでろってことだ」
看護師「ええっ、そっそんなあ」
所長「自衛隊は原発の事故対応で一杯いっぱいだ。助けにはこれねえ、自力で避難するぞ」

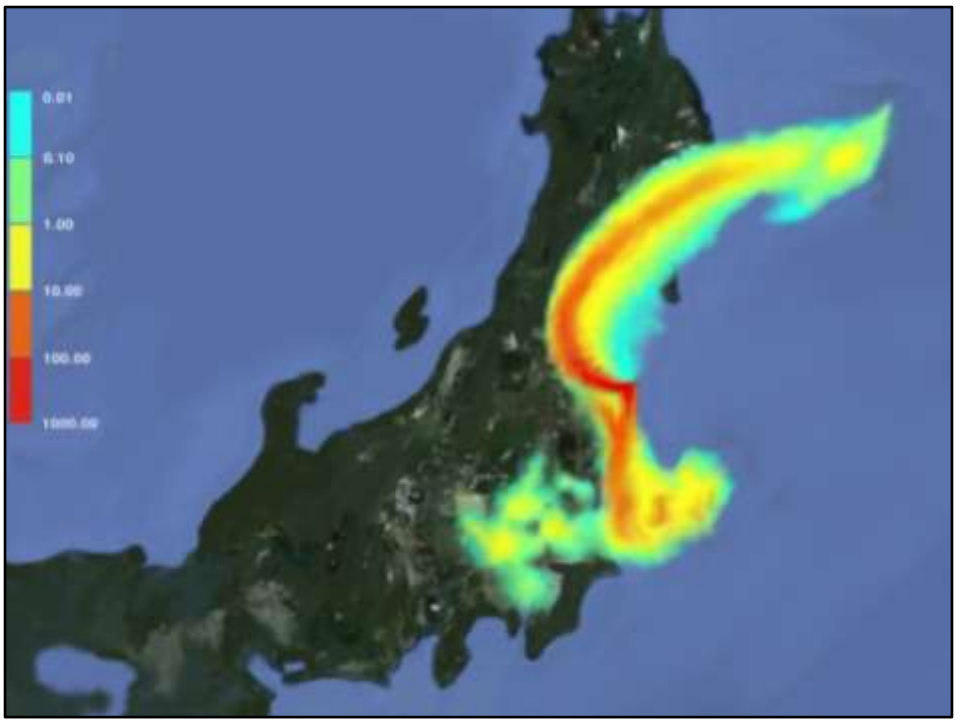
看護師「もう乗れねえ、一杯いっぱいだ」
所長「わかった第一便、行ってくれ！降ろしたら直ぐにかえってくるんだぞ」
看護師「了解です。第一便11名乗せ、出発します」
所長「次の人はあちらのマイクロに乗ってくれ！詰めれば30人はのれっだろ。一人でも多くをのせるんだぞ」
長女「さあ、あちらに行きましょう。大丈夫ですか？歩けますか」
患者「大丈夫だよ。それこそあんたこそ大丈夫か？」
長女「えっ、なんでですか？」



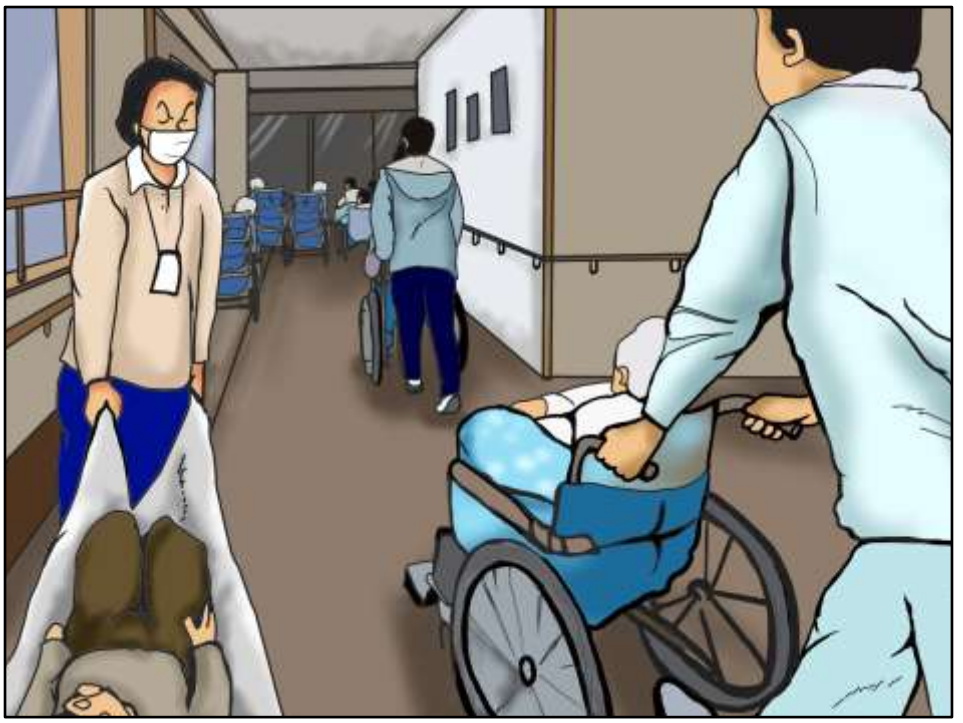
患者「原発が爆発したってきいたからよう。おら達のような年寄りは関係ねえけど。若いもんはいけない。年寄りはいいから、ほっといて早く逃げろ！」
長女「そんなこと、できるわけないですよ。いいからこちらにきてください。じゃないと本当においていきますよ」

所長「よし、これで最後だな、全員いるかどうか確認してくれ」
先輩「大丈夫です。確認してます」
所長「よーし、じゃあ夕食の手配だ。みんな頼むよ」
先輩「頼むよって、ここに食うものがあるんですか？」
所長「なんかあるだろ。聞いてみるよ」
看護師「もう聞きました。なにもないそうです」
所長「う～ん・・・そうか。しかたねえ」
看護師「しかたねえってどうするんです。このままだとまた死者がでますよ」
所長「ここにも長くいられねえみたいだ」
看護師「ええっどういうことです。来たばかりじゃないですか」
所長「来る途中に連絡が入ったんだけど避難区域が20kmに広がったみたいなんだ」
看護師「そっそんなあ」

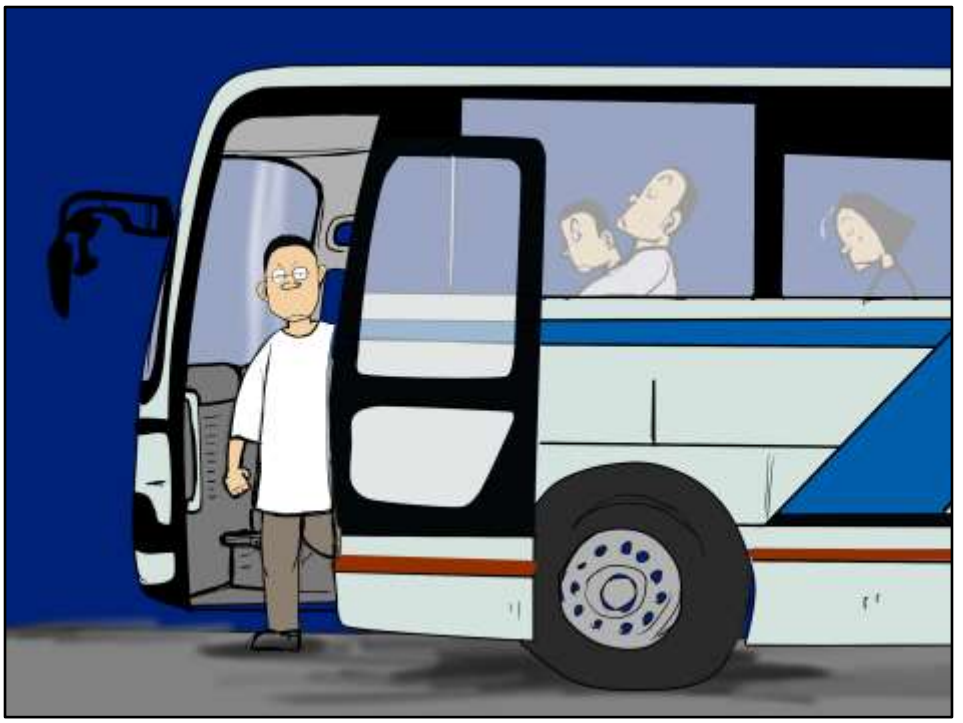
NA「一方、残りの家族は自宅にとどまり、娘の帰りを待っていました」
父「みゆき、大丈夫かなあ。あの子、おめえと違って体、弱いところあっだろ」
母「大丈夫、大丈夫よ」
次女「私たち、ここにいていいの？皆、避難してるみたいだし、近所だれもいないよ」
母「私たちは待つの。あの子が帰ってくるのはここだけ、ここしかないの！ここに誰もいないと何処に行けばいいのか分かんないでしょ」



父「でもなあ。原発のことがあるし・・・放射能が広がってるみたいで、ここもまずいってきいたぞ。啓子のこともあるし,啓子だけでもにげるか？」
啓子「私だけでぇ・・・いやよ無理、どうやって逃げるの？」
父「ガソリンのことを考えると行って帰るというわけにもいきそうにねえ。チャンスは1回だろうなあ」
母「なら、あなたと啓子（次女）だけで逃げて、私は待つ。あの子が帰ってくるまで私は待つの」
父「じゃあ、おめえはどうすっだ？」
母「何とかする」
父「何とかするって・・・・・」



NA：場面は介護施設に戻ります。
所長「ここもだめだ。南相馬へ移動するぞ！」
看護師「無理です。もうガソリンもないし、みんなの体力も限界です。救助をお願いしてください」
所長「頼んでいるよ。でもダメだ。もう無茶苦茶で、とても手が回んねえみたいだ」
看護師「年寄りは死ねってことか」
所長「とにかくここにいても食いもんはねえんだし、死ぬのを待つだけだ。一人でも助けるためには移動すっかない。頼むから、やってくれ」
先輩「わかりました。でっ‥何処へいくんですか？」
所長「南相馬だ。南相馬の介護施設　長生院にいくぞ」



バスが到着し、患者がおりてくる）
看護師1「おーい、避難のバスが到着したぞ！」
所長「どういうことだ？」
看護師1「別の病院からここに避難してきたみたいです」
所長「そっそんなバカな！」
どったーん
所長「どっ・・・どうした？」
先輩「みゆき、みゆきちゃんが倒れました」
看護師「直ぐに部屋にはこべ、点滴の用意！先生にもきてもらうんだ」

先輩「大丈夫、みゆきちゃん大丈夫」
長女「はっ、はあ・・・あっ、先輩…私・・・」
先輩「起きなくっていい、寝てなさい。先生いわく疲労だって、あんた丸三日寝てなかったでしょ。疲れが一度に出たみたいね。よく頑張ったよ、この職場に来てまだ1年もたってないのに・・・経験のないあなたをここまで追い詰めて、先輩としてもうしわけないわ。ごめんね」
長女「そんなことはありません。私こそ迷惑かけて・・・皆さんは？」

先輩「何とかみんな、無事、移動したわ！貴方が、最後」
長女「もっ申し訳ありません。皆さんの足を引っ張ってしまって」
先輩「いいの、いいのよ貴方はよく頑張った。先生いわく、これ以上、頑張ると貴方の命があぶないって・・・今ね婦長さんが家に電話してくれているから・・・」
長女「家にですか」
先輩「そう家に・・・あなた一度家に帰りなさい」

婦長「みゆきちゃん、みゆきちゃん！お母さんよ、かわってちょうだいって」
長女「私大丈夫です。変わると気持ちがゆらぐんでいいです」
婦長「何言ってんの、いいから変わんなさい」
長女「あっ・・はい、わかりました。・・・・ああ、母さん・・・うん、うん、私大丈夫.....うん、大丈夫がんばれっから・・・うん・・・うん、じゃあ婦長さんにかわるね」
長女「すいません。母が変わっていただきたいということです」

婦長「わかりました。はい。そうします。ちょっと待っていてくださいね。みゆきさん、こっちに来て来て頂戴」
長女「はっはい」
NA「婦長はしっかりとそして力強く、長女を抱きしめます」
婦長「これはお母さんの気持ち、しっかりうけとめてね」
長女「はい、ありがとうございます」

NA「母の力を得た長女は再び職場に復帰するのでした。しかし、彼女の体は既に限界でした」

翌朝、長女は皆の世話をする中、再び倒れたのです。見るにみかねた先輩が再びみゆきの自宅に電話しました。

先輩「お母さん、ダメです。このままだとみゆきちゃん、死んでしまいます。なにも言わずに迎えに来てください。お願いです」
母「でも、そちらの皆さんも大変なときに・・・」
先輩「こちらは大丈夫です。明日の朝には自衛隊が来てくれることになったみたいで・・・」
母「わかりました。直ぐに向かいます」
カチャ

父「どこだ」
母「南相馬だって・・・迎えにいってくる」
父「行けんのか」
母「行くしかない」
次女「私も行く！」

父「ガソリン持つか心配だけど・・・・」
母「行くしかないの！行くしか」
父「うん、そうだ、こう！ガソリンがなくなったら歩いていけばいい。皆で姉ちゃんを迎えに行こう」

NA：どうにかこうにかたどり着いたのですが、長女は家族の姿を見るや否や
長女「私、かえんないよ。みんなを残して帰れるわけないよ」
母「・・・そんなことを言っても]
長女「私はかえらない」
先輩「大丈夫よ。みゆきちゃん、ここは何とかなるわ、それより貴方が心配。本当によくやってくれたわ。お願いだから今日はお母さんと一緒に帰って」
長女「・・・でも」

母「でもじゃない。あんたがここにいる方が皆の迷惑になるの。とにかく一度、元気、取り戻して、仕事にもどりなさい」
NA「そういって母は長女をしっかりと抱きしめます」
先輩「そうよ、お母さんの言うとおり、何とか自衛隊とも連絡が取れ、救助がくるみたいだから・・・ね行って」
娘「そ、っそうですか」
NA［そう言い終わるか、終わらないかの中、長女は母の腕の中で再び意識を失ったのです。母はそのまま車にのせ、家族四人は4日ぶりに浪江から避難したのです。」

そして施設の人々も自衛隊の救助が入り無事、浪江を脱出することができました。
NA：あの日から6年、私たち家族は福島市において避難生活をしています。一時は家族崩壊の危機にあった我が家ですが、震災を皆で乗り越えたことで家族の絆はつよまりました。手を取り合わないと厳しい避難生活を生き延びることはできなかったからです。まさに不幸中の幸いです」

「娘が故郷　浪江町の家を訪れることができるまで5年かかりました。その家も今は解体するための順番待ちです。そうです、私たち一家は帰らないと決めました。その代わり、浪江町を忘れないためにもこの物語を語り継いでいこうと思っています。6年たった今も深い闇の中に閉ざさしたままの方々がたくさんいます。語るに語れない、語りたくない、それが東日本大震災、東京電力福島第一原発事故です。それが放射能災害・・・自然災害との大きな違いなのです。そのことを一人でも多くの人に知っていただければ幸いです」